

浄土



昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別投函取扱) 第三五二号
昭和四十七年六月二十五日印刷 昭和四十七年七月一日発行

第三十八卷

第七号



1972
7

七 月 号



—目 次—

表紙 「京都知恩院」松涛達文画

恋い慕うところ— お盆を迎えて	梶 原 重 道.....	(2)
日本人の祖先をたずねて.....	斎 藤 忠.....	(6)
聖典解説⑥ 善導大師の発願文.....	小 浜 勇 貫.....	(11)
私の「親」.....	船口暉子・椎尾弁章・吉池誠.....	(14)
仏教の手びき③ 日本仏教の宗派について		(18)
異僧真覚(7)	柴 田 六五郎.....	(20)
新刊紹介「法然人生論」「旅日記」.....		(24)
浄土宗史夜話⑥ 明治の高僧行誠上人.....	三 田 全 信.....	(26)
「道」愛宕への道.....	高 橋 良 和.....	(30)
浄土宗列祖の墨蹟をたずねて.....		(32)

語和声念



—聖者の心—

先頃（五月三十日夜）イスラエルのテルアビブ、ロッド国際空港で、三人の日本の若者がパレスチナ解放人民戦線（PFLP）の指図のもとに、ライフルや手投弾でターミナルにいた約三百人の乗客を襲撃し、死亡二十二、人負傷五十九人にのぼる大量の犠牲者を出したことは、日本の若人の無謀さをまざまざと示した悲惨事として全世界の耳目を奪ったことであつた。しかもPFLPは、これを殉教者「バトリック・ウルグエロ」チームのゲリラ活動といい、世界革命勢力の闘士たちの英雄的な行動だと賞賛し、また三人の内生き残つて捕えられた赤軍派に属すると自称する犯人も、その残酷性について何ら反省の色を見せないのみか、「早く死なせてくれ、そうすれば自分は聖者になれるだろう」と、言つたと伝えている。彼らがこの事件を「殉教」者的英雄行為としてやがて聖者化されると妄信していることに、わたくしは言ひようもない憤りを覚えすにはいられない。世界同時革命の悪夢に酔いしれた若者に特攻隊のような殉教的悪議をたたきこむことによってこの暴挙を犯かせたことに對して一層の憤激を覚えすにはいられない。

なるほど西欧には宗教の名による戦いの歴史がある。しかし、この者を葬り去つて顧みない、この非情さは、少くとも東洋の聖者の心にはない。不殺生戒は聖者の道が生命と人格との尊重に通ずることを示している。一匹の蟻の命も人間の生命同様尊ぶべきだと常々矢吹慶輝博士はわれわれに教示せられた。「常に懺悔の心を失つてはならぬ」との教えも、気づかざるに生命を損い人格の尊厳を軽んずることなかりしやの反省の心を説いたものである。宗教的聖者の心には生命の尊重と人格の尊重の烈々たる愛情がたぎっている。自己中心のエゴイズムの前に他を傷けるさえ意に介しない現代の風潮は、全く別個の愚者の心、地獄への道に外ならない。

（中村康隆）



恋い慕うところ

—お盆を迎えて—

梶原重道

(浄土宗教化部長)

百年を単位とした大きな老杉の林立が、奥の院への参道の石畳をはさんで大空に聳えたつ姿は、高野山の偉観である。

それは大木の並木のように、また原始林のようでもある。それでいて生い茂るこの老杉の配列と、枝の交錯は人工ではつくせない自然の妙技と云えよう。

数知れぬさまざまな苔むした石碑の群像が、そのあいまに幾百年の霊を鎮めているのも、たしかにこの偉観である。観光ばりの偉観から離れ、拡声器からひろがる案内人の説明をききながら群参する人だまりに伍しても、騒然たる中に一つの威圧に似た心の緊張を感じ

るのはなぜであろうか。

掃きよせられた茶褐の老杉の落葉が、ここかしこに白い煙をあげて燃っている。その特有の香りとともに幽玄と靈氣の足音を感じるのである。

天空に向って垂直にのび繁った大木の一本を仰いで、そこに無限と悠久を感じるのもこの参道での特色である。裏道が舗装されバスやタクシーが乗りいれられる都市化から、軽うじて汚染の大気と、清澄な大空はただここにのみ残されている。しかし三宝鳥が啼いたということも、今は遠い昔の夢のような物語りにすぎなくなってしまうこともたしかである。

大師をまつる御廟の屋根が、墨絵のように老杉のあい
まから、眺められる頃自然石が目にとまる。

父母のしきりに恋し雉子の声

芭蕉の句碑である。

忘れさっていた父を憶い、思いもよらぬ母の声がする。

もの云わぬこの冷たい句碑に刻まれた俳聖のこの句境
が、とうていわれわれにはわからうはずはない。一声啼
いてこの老杉の中に姿を消した鳥の響きに、われとわが
姿にめざめるにちがいない。寂とした繁みの中で鳥が残
した余韻の中に、わが心を知り、わが想いに気づくであ
ろう。それはただ気づくのであって、それは何であるか
はわれわれには容易にわかることではない。しかし父母
をしきりに恋しく思ったところに、俳聖芭蕉の心があっ
たのである。

啼いて飛びさった雉子を通じて、芭蕉にとっては父を
知り、母を見たのかも知れない。それゆえにこそしきり
に恋しくなったのである。雉子の声のきびしさととも
に、恋しさはしきりにはげしかったにちがいない。

旅に出て、自然を友とした芭蕉でありながら、啼く鳥
の声に父を恋い、母を慕う心を忘れることはできなかつ
た。そのゆえにこそしきりに恋しくなったのではなから

うか。私はそこに芭蕉の真実の人間性をみることができ
るように思うのである。

月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人な
り、船の上に生涯を浮べ、馬の口をとらえて老いをむ
かうものは、日日旅にして旅をすみかとす、古人も
多く旅に死せるあり、余もいつれの年よりか、片雲の
風にさわれて、漂泊のおもいやます。

とは奥の細道の名文ではあるが、旅をすみかとし、漂
泊のおもいやまざる中であって、思えば常に父を忘れず、
母を慕いつづけた彼であつたような気がするのである。

ねてもさめても現代の生活は情報化され、すべてが生
産と享楽に奉仕しつつある都市化の中で、核家族が優先
し、老人が棄老化されつついたずらに孤独を嘆いてい
る。親と子は断絶という悲しい名のもとに隔絶された。

これでは同居しまたは同じく生存していても、それはい
たづらになきがらにすぎない。相語り、互に顔をあわせ
ながらの他人である。

雉子の一声に父母をしきりに恋し、慕いつづける俳聖
の切実な心の片鱗も、これらの人びとには見出されそう
もない。形態としての親と子の単なる対面であり、人形
としての機械的な對話にすぎない。たとい形は消え、声

は聞かれなくとも、しきりに恋慕う心の中には、父が生きて、母が語りつづけるであらう。そこには信の世界がひらけ、心が相通う信仰の境地がある。

幽明境を異にするのは現実の世界である。しかしそれでいて相交い、相通するものが信仰の世界なのである。父を念わず、母を念わず、父を慕わず、母を慕うことのできないものには、幽明を問わず永遠に父母は存在しないであらう。

ご先祖まつりとしてのお盆供養は、この意味において、亡き人を思ふぬものにとつては単なる形式にすぎない。迎え火をたきお精霊を迎え、茶湯を献じ、百味を供えたとしても、その心のないものにとつて何の意義があらうか。

私の檀家で、ある齒科大学の教授で、その附属病院長をしている人がいた。次期学長に予定されていたが六十三歳を一期として去った。まだ半年にもならない。温厚実篤そのものの紳士であった。教授仲間も学生もその人柄に信服していた。盛大な告別式と、さらに全学をあげての大学葬が行われた一事をもつてもその人となりが証明されるであらう。

院長室からその人の私物を整理して持ち帰った品々の中から、あき伍におさめられた遺書がでてきた。奥さん宛のもの、長男宛のもの、親属や、学長宛のものなど関係者一人ひとりにゆきとどいた遺書がはいっていたという。その奥さん宛の中に、「私は両親の許へ参ります」という一行があつたということを、初七日にお参りをしてきかされた。手術のため入院される前にすべて書き揃えられてあつたということである。

学位をもち教授や院長という肩書きをもち、いわゆる功を遂げ名をなして六十三歳にまでなつた人が、「私は両親の許へ参ります」と書き残される人がこの世の中にはたして幾人いるであらうか。

何という素晴らしい言葉であらう、最近の私の心をこれほど動かしたものはない。味わえは味わうほどくみつくせない意義があり、思えば思うほどはかりしれない味わいを感じるのである。妻子を養育する家庭の中で、学生を教授する大学の中で、治療の全責任と監督の任にある附属病院の中で、そしてあらゆる交渉をもつ社会の中で、この教授を常に支えたものが、この言葉ではなかつたであらうか。

「私は両親の許へ参ります」という言葉を通してこの

教授と両親は常に一緒にあったことを知るのである。この命日の墓参は欠かさなかったし、ご先祖のおまつりは家族揃って鄭重であったのも、そのためであろう。

学者として厳しくかたくなになることなく多くの学生たちに慈父のように慕われ、同僚からは信頼され、接する近隣の人びとからは暖かく迎えられたこの人の円満な人からは、帰するところわが父を慕い、わが母を忘れることのない日常であったからにちがいない。そして多くの信望をあつめて高められる地位につきながら、決してそこには片鱗のたかぶりやおごりをみせなかった。謙虚そのものの人であられた。

それらの源泉は、常に父に仕え、母に奉仕することの心を忘れなかったからであろう。しかもそれは姿なき父であり、声なき母への孝養であった。お彼岸やお盆には自ら陣頭にたつて家族ともどもお墓の清掃をし、花を手向け香を捧げつづけた幾十年の姿を、私は今改めて憶い浮べるのである。同じ大学に籍をおいて学位をとりアメリカに現在留学中の長男が幼い頃からこの父とともに継続した行事でもあった。そのゆえにこそ後継者としてのその長男がいま、亡父の意志をついで、立派に育成されたのであろう、と私は信じている。

目連尊者のように餓鬼道にあえぐ亡母の姿を見、それを救えなくとも、われを育てあげてくれた親を偲び、さまざまなその思い出を通じて慕う心を失いたくはないものである。あわただしい日常に追われ忘れつづける日が多いであろうけれど、せめてめぐりくるお盆だけでも父を慕い母を恋う心を取りもどしたいと思う。そのゆえにこそお盆はわれわれの生活の中に生きるのはなからうか。

蓮の葉の上に山海の珍味を盛り、汗だくで廻る棚経僧を迎え、ご先祖代々の精霊への回向を通じて、亡き祖父母や両親であるならばなおさら、現存の父や母であるならば改めてその健在をよろこび、恋い慕う心を静かにかきたてねばならない。

そこにこそお盆の意義があり、おまつりの行事とともにわが心にお盆が生きているのである。現存の父や母を忘れてご先祖の供養はない。健在の父をよろこび、母への奉仕こそお盆を迎える若者の心でなければならぬ。

いかに多くの両親を泣かせ、悩ませていることか、目連尊者がみた地獄の母の姿は、実は今日われわれが現世において与えている両親への仕業なのである。いつまでも父を恋い、母を慕いつづけたい。



日本人の祖先をたずねて

語り手 大正大学教授 齋藤 忠

奈良明日香村の高松塚古墳の発掘を契機に、世は古墳ブームである。その古墳を通じて私たちは、遠い祖先の生活をうかがい知ることができ、その中に今や失なわれつつある、日本人の心の原点を見出し得ることもできる。そこで前東京大学教授であり、現在文化財専門審議会委員としてご活躍中の齋藤忠先生にお尋ねし、日本人の祖先をたずねることにした。

——先生が考古学に興味をもたれた動機はなんですか——
大学（東京大学文学部）では国史を専攻したのですが、その卒業論文が「本邦古代社会における葬制の研究」という題

です。今にして思えば、その頃から考古学ことに墓制というものに関心をもっていたのでしょう。以来今日までその分野の研究にいそしんでまいりました。

——埋葬の方法によって生活や思想の一端がわかると思いますが、古代社会においては何か規則のようなものがあったのでしょうか——

古代社会においては厚葬が行なわれ、墓を大きくし、死者が生前用いた道具などを一緒に埋めたのです。一方で財力の疲弊、人力の消耗がさげばれましたが、この厚葬思想が大勢をしめました。古墳の発達はこの思想を如実に語っていると思います。ところが社会生活の向上、変革に伴ない七世紀中頃には、大化改新の詔にも示されているような、厚葬をいましめる埋葬の規則が定められ、所謂薄葬の時代を迎えたのです。

——その頃の埋葬の方法はどうだったのでしょうか——

この詔によれば墓室も狭く塚も小さく整備されてきました。が特に興味のあることは親族が亡くなった時、身体の一部を傷つけること、殉死をしないことなどを定めていることです。これを見ると、当時はこうした風習がかなり広範囲で行なわれていたようです。これは薄葬との関連において考えるべきことと思いますが、人道的立場から禁止されたのでしょうか。

——厚葬の場合は土葬であったと思いますが、火葬はいつ頃から行なわれるようになったのですか——

土葬から火葬への転換、これは葬制思想研究の上では最も注目すべき点であるのですが、「日本書紀」に文武天皇の四年（七〇〇）に道昭という僧侶によって、わが国において初めて火葬が行なわれたことが記されております。道昭は唐へ留学しておりますので、その折にかの地でそうした方法を見つけたのではないのでしょうか。

——皇室でも火葬が行なわれるようになったのですか——
道昭が初めて火葬を行なってから二、三年の後、持統天皇が皇室として初めて火葬にふされております。以来皇室においても火葬が行なわれるようになりました。そしてこの薄葬思想が更に進んで平安時代になりますと、散骨といって骨をまきちらすことが皇室ですら行なわれたのです。御廟に木塔などの塔が建てられているのはこの影響のあらわれです。これが江戸時代の後光明天皇の時、土葬にもどされました。これには面白い逸話がございます。京都の禁裏御用達商人魚屋八兵衛という人が、玉体の身を火葬にふすということは恐れおおいことであるという運動を起し、これを契機に皇室においては土葬が行なわれるようになったのです。この功績のためか知れませんが、魚屋八兵衛はのち贈位されております。

——先程の散骨というのは、各地に分骨されたということですか——

違います。散骨というのは薄葬思想の最上のあらわれであり、骨も何もまつる必要ないということのようです。

——インドの故ネール首相の遺骨は空中より大地にまかれたようですが、これと相通じるものですね。その外葬制の上で何かございましたらば——

普通葬制の方法としては地水火風（空）の四つがあります。そして各民族それぞれの方法によって葬むられたのです。珍らしい一例をあげますと、昨年中央アジアのウズベク共和国を訪れた折、博物館で三四世紀頃のツグト人が用いた小さい棺を見ました。ソグト人は死者を鳥か獸に食べさせ、残った骨を集めて棺に収めたようです。その目的のためにそうした鳥や獸を飼育していたという、葬制の特殊な例としてあげることができると思えます。今日伝えられる鳥葬も、こうした方法の名残りとも見ることが出来ます。そして更に極端な方法となると、骨を粉にして団子を作り、それを鳥に食べさせ、すべてこの世から無にするという、薄葬思想のある意味では一番徹底した方法とも考えられることも行なわれたようです。

——日本においては水葬は行なわれたのですか——

水葬自体、遺骸を水中に収めるということから考えた場合、厳密にいった水葬となるかどうか問題がありますが、遺

骸を船に乗せどこか遠くへ送るという、船葬ともいうべき広い意味での水葬が行なわれていたようです。これを裏づけるものとして「古事記」などにもこれに類した文が見出されます。これに関連して高松塚古墳より古い時代の、九州の古墳の壁画に「天の鳥船」名づけられたのがあります。これは船の船先に鳥が描かれています。この鳥は重要な役割をはたしていると考えられます。死者はこの鳥の案内によって、遠いかの地へ導びかれたのではないのでしょうか。この壁画は古代日本において水葬が行なわれていたことを具現化し、描かれたとしか考えられません。

——古墳に関しては、朝鮮・中国の影響がいろいろいわれておりますが、葬制においてはどうかのでしょうか——

葬送儀礼においてどの程度影響があったか否かは、まだまだ考える余地はあります。例えば古代中国の壁画に屋根の上に鳥がとまっているのがあります。この鳥が先の船先の鳥と同様、死者を導びくという両国共通の考え方であったのか、それとも日本へそうした考え方が入って来たのか疑問ですが、いずれにしても中国の葬送の方法が日本に入ってきたことは事実であります。

——その他古墳の壁画から葬送に関して、何かうかがい知ることが出来ますか——

遺骸を収めたと思われるところの枕のそばに石が立っており、そこには人物が描かれてあります。この場合には死者の霊、魂を守り、保存するという意味あいがあると思います。

そして先の船の壁画などを考え合せた時、死者の住む別の世界を想定していたのではないのでしょうか。このような考え方が古代社会においていつ頃からあったのかということ、これはかなり問題にしてよいと思います。

——古墳には棺（骨）収める場所があるのですか——

時代により異なります。古い時代には木や石で作った簡単な棺を高塚の上部に鏡・剣などと埋葬しています。そして五世紀後半になると、石で作った部屋のようなものの中に収めています。この頃から死に対する考え方が変わってきたようです。と申しますのは、副葬品が日常の生活で用いた品々からです。これは死んで後も現世と同じ生活を、あの世でも送ると考えたのではないのでしょうか。ですから原始社会から古代社会にかけて死に対する考え方、霊魂の考え方の上で変遷が見られるわけで、この点は今後私たちの研究すべきところでもあります。

——この死んでのち、魂と共にあるという考え方と、別のところに宿るという考え方はいつの時代にも問題となるところですね——

日本において魂の存在をいつ頃から考えたかがまず問題になります。そして前のくり返えしになると思いますが、埴輪の中に家を形どったものがあります。古い時代にはこれを遺骸の上部に収めています。これは魂が一度どこかへ行ったとしても、再びこの家に帰ってくるという願いをこめたものではないでしょうか。鎮魂思想のあらわれでしょうね。こうしたことから、かなり古い時代から魂の存在を考えていたことが想像されます。

——今月はお盆ですが、お盆になりますと迎え火を焚き魂を迎え、精霊棚を飾り、そして送り火を焚くということが行なわれています。何か共通した考え方のようですね——

日本古来の魂をなだめる、鎮めるといふ考え方があり、それと仏教思想とがとけ合って、独特なものとなったとも考えられるかも知れませんね。これに関連するか否かわかりませんが、石器時代にすでに遺骸のそばで火を焚いていたことが確認されており、いわゆる篝火といわれるもので、迎え火などとはややニュアンスが異なり、火とか赤いものとかによつて悪いものをしりぞけるということから、死人を恐れていたとも考えられます。ですから遺骸の腹の上に石をのせたり、頭に甕をかぶせているものもあります。

——現在でも、例えば死人がでると神棚をしめたりいたし

ますが、そうした生活上の慣例というものは数多くあり、無意識のうちに行なわれておりますね――

原始の社会から行なわれてきたそうした民俗的なしきたりに、仏教思想が融合し同化して、独特な慣習を生みだしたといえましょう。先年奈良での或る葬儀の際、出棺の時茶碗を石にぶつけ割るのを見かけましたが、古い時代にはこれに類した、わざと割ったとしか考えられない土器や壺の底に穴をあけてあるものが発見されております。これらは死を恐れたということから、死人の生前使っていたものと区別するために行なわれたと考えられます。いずれにしても古代より行なわれて来たしきたりが、今日まで伝承されているものが、かなり多いことが考えられるのではないのでしょうか。

大変興味深いお話しを拝聴した。考古学の分野はその確たる証拠物件にとぼしいことから、推測の域を出ないこともあるであろうし、反面そのわずかな史料から、今まで知ることのできなかった一面がクローズアップされることもしばしばである。今回もこの外に数多くうかがうことができたが、誌面の都合で掲載できなかった。次回機会があればもう一度と
思っている。

／＼文責編集集部／

生命の手入れ

雨あがりの休日、ひさしぶりに庭前に出て、すっかり緑濃くなった植木の手入れをした。地方育ちの私にとり、小さい頃から父が手入れをする様を見ながら、自己流ながらも覚えただ方法で鉢を入れていく。そばでその様子を見ていた都会育ちの家内が、「せっかくのびてきたのに、そんなに切りこんではかわいそうよ」という。「そんなことはない、たしかにのび放題にすれば、植木の生命をのばしているようだが、人が適当に手を入れてやるのが、かつて植木には良いんだ」と、いいかえした。幼ない頃から自然にとけ込んで育った私と、都会の喧噪の中で育った家内とは、今にして逆の考えのうちに生活していることに気づいた。それは自分のできなかったことに対するある種の憧憬かも知れない。

人の生命も、また同じことがいえよう。何不自由ない生活を送り、何の挫折感を味わうことなく過せば幸福かも知れない。しかし、人生は平々凡々に送れるものではない。それは誰もが波乱に富んだ一生を終えることから知り得よう。だからたえず私たちは、いつどのような形で不意をつかれてもたえられるように、見えない植木の手入れをおこたってはならないと思う。



聖典解説

願くは弟子等、命終の時に臨んで心願倒せず、心錯乱せず、心失念せず、身心にもろもろの苦痛なく、身心快樂にして禪定に入るがごとく、聖衆現前したまい、仏の本願に乗じて阿弥陀仏国に上品往生せしめたまえ。かの国に到りおわって、六神通を得て十方界にかえりて、苦の衆生を救済せん。虚空法界も尽きんや、わが願もまたかくの如くならん。発願しおわんぬ、至心に阿弥陀仏に帰命したてまつる。

善導大師の『往生礼讃』には、日没と初夜と中夜と後夜と晨朝と日中の六時、一日六回の勤行式が定められてあり、この発願文はその中の日没礼讃に出るものである。浄土宗では、日没にかぎらず日常の勤行にこれを音読あるいは訓読し

善導大師の 発願文

一大正大学名誉教授一

小沢勇貫

ており、とくに「教会衆勤行式」として在家者のおつとめには、和よみでかならず拝読すべきものとして来た。平生において決定の信心をもつことが、真宗にしても西山派にしても、後の浄土門でみな大切な教えとされるが、三昧発得の高徳であられた大師が、なお且つこの文にあるように、臨終の正念往生をねがい、人びとをも勧められたことは、ひとしお尊く仰がれ、浄土の信仰が生々しく感じとられるのである。四十八年前のこと、私は師匠が命終される際、師命のままに來迎仏の軸を部屋にかかげて、他の弟子たちと発願文をよみ静かに念仏をとなえて、師匠の正念往生を見とったことも、今日まで忘れることが出来ない。一期の大事、臨終の正念はまた人間のねがいでは足りない。

「いつでも臨終」の用心

『往生礼讃』に定められた六時の勤行は、至心に阿弥陀さまを礼拝し、阿弥陀さまや極楽浄土のすぐれた功德とそのうるわしさを讃え、その文を唱えて往生を願うにあり、礼拝（全体で百二十礼）、讃歎、願往生を内容とするものであるが、六時にそれぞれ終りに無常偈と称するものが挙げられている。日没礼讃では七言八句の詩として、発願文の前に載せられるもの、この詩を併せてお読みすると、大師のご精神が一層切実にまたありがたく拝される。

人は営みしげくして 日ごと夜ごとにその命

滅び去るをも覺り得ず 風にゆらるる灯しびの

消えんとすることくなり 住みがたくして六道を

行くともわかずさまよえり 未だ解脱し得ざる身は

あわれ苦海を出でがたし いかで驚き懼れざる

おのおの聞けよ汝らは 健く力のある時に

自ら策しはげまして 永遠の住家を求めよや

（大木惇夫氏和訳）

無常の鉄則の中で日々夜々時々刻々去って行き、そうしてまたはかないおたがいの命、盛年の氣力に満てる時にこそ、精進に自らはげまして、永遠なる浄土をねがい求めよと人に

も勧められている。熱烈な至情がいかにもその語句にみみけるものがあり、私ども老年のものには原文に一層迫力を感じるけれど、いまは訳文を挙げた。

諸行無常ということ、これは仏教の基本的な考え方、とくに日本人びとには、この語は古くから知られ、その思想と感化がよく浸透して来た。この地上にあるものは、おしなべて死をまぬがれることができない。成人であればその事実はみんな知っている筈なのである。と言っても普通の人情では、死をそんなに切りつめて自分のこととは考えていないし、むしろ死など考えたくないというのが多くの人の気持であろう。切実に自分のこととは考えず、自分だけは死なない。遠い先のことを考えて、自分の間死につかないと思いいる。これが凡夫の無智、無明といわれるものなのである。大師の無常偈はまことに鋭い警告である。人命のはかなさを知り、時を惜んで精進することを、同時におしえておられる。無常迅速であり、また死の縁無量である。おたがいの命はいつも危機にさらされているのである。浄土宗の第二祖聖光上人は、念仏者の用心の至極を、念死念仏の四字をもつて教えられた。先頃の本誌の講座で、佐竹先生が触れておられる実存主義の現代哲学で、人間存在を死への存在として規定しているのは、仏教の考え方に近いといえよう。死を正

しく見ることが出来て、初めて正しく生きる人間の目ざめがあるのではないか。

正念往生のねがい

以上のような無常偈を説きおわって「更に心口に発願すべし」と書かれて、心にも念じ口に唱えるようこの発願文が挙げられている。なおこの文が天台智者大師の発願文によったものと見る説があるけれども、智者の願文なるものが恐らく真作ではなく、善導大師のこの文こそは、大師自らの信仰にもとずき創めて作られたものに相違ない。

さて本文の内容について、良忠上人の『往生礼讃私記』などには、この文は往相おそほうと還相げんほうの二つの願いを述べたものとし、初めから「上品往生せしめたまえ」までを往相の願、「かの国に到りおわって」から終りまでを還相の願としている。大師は浄土往生の信心の持ち方、いわゆる安心の内容としても、また回向を明かされる場合も、この往還二種の相を説かれた。すなわちこの穢土から浄土へ往生をねがうことと、往生して後大悲心をおこして穢土に還って人びとを教化したいと願うこと、自利々他の願いをおこすことである。そうして往相の願いの中にも一句一句にみな志願がこめられているのである。

初めに、願わくは私ども仏弟子同行のもの、いまわの時にのぞんで「心顛倒せず、心錯乱せず、心失念せず等」とある。この世の真のすがたを知らず、道理にそむくのを顛倒といい、三顛倒、四顛倒などを挙げるが、ここではないまわの際に、業障や重病などに苦しみなやまされて、卒然心が狂い乱れることなきよう願じたのである。心が錯乱し失念することなくとあるのも、死苦のために知覚が昏く散乱して対境が分らなくなるようなことがなく、正見の心になるのを願うのであって、次の「聖衆現前」にもかかわることである。また身と心にもろもろの苦痛がなく、身も心も禅定に入ったように安楽に、そうして阿弥陀さまや観音勢至諸菩薩の来迎を念じて、聖衆現前したもうことの願心をこめられている。「上品往生」とは、観無量寿経によると、往生するものに上品上生から下品下生まで九種のちがいがあり、生れる浄土にも九種あることが説かれてあり、願文ではその中上品の往生を願われている。上品の往生ができてこそ速かに不退の位に至り、還相教化の本意が遂げられるのである。六時礼讃の勤行といい、また大師が特別な広法事を定められた『法事讃』、『般舟讃』にしても、厳格な修行で上根の者でなければ能わぬつとめであって、上品往生を願ぜられた大師の面目がうかがわれる。



私の親

船口 暉子

(全国仏教婦人会事務局長)

主、師、親の三徳を兼ね備えた私の父等と申しましたら、今時と笑われることでしょうが、私はそう信じてその教えをまもり、現在の幸せに感謝し、胸を張って心からその恩に報いたいと常に願っております。

神武天皇の肇国の三大誓願、積慶、重暉、養正の一字

私の『親』

を選んで命名してくれたとききました時、父が心をこめた吾が子へのはなむけに私は無限の誇りを感じ、此の名に恥じない一生を過せます様にと只管、仏天のご加護を祈るのでした。

七十年前の日本を現在にくらべて、いろんな点でずいぶん変わっておりますが、親の慈悲には変りはないと信じます。

私は滋賀県長浜の妙法寺に生まれました。秀吉公がその地で天折された息、秀勝公の菩提を弔う為建立されたという由緒の寺院でしたが、先代の時、町の大火に類焼して仮本堂でした。

父は嫁いで来たばかりの母と共にそれは、想像も及ばぬ苦勞をしたらしいですが、その劇忙の中で、父は幻燈

機を母はオルガンを、共に荷車に積んで役僧と共に伝道布教に廻っていたということです。

こうして無理な年月を過しているうち、生後間もない妹が、病死致しました時、母は看護の手が行き届かなかったことを悔い、父の協力を得て、長浜病院と提携して自ら看護婦養成所の設立を思い立ち、街の病人を見舞い、困っている人には牛乳、卵、氷等を届けました。

大正十二年関東大震災の時は避難して来る罹災者の為に、米原駅に出張救護班を設けて救急治療に専念致しました。私も手伝いを致しましたが、両親は私を医学にすませ、施療病院をさせたのですが、不幸私は、病の為一眼を失明し、折角の親の切望を成就出来ず、そのことが何より悔やまれます。

夫婦揃って仏法興隆の為、社会事業の為に全く私心の無い努力によって漸く田舎には珍らしい本堂の建築、看護婦学校の文部省認可と一応の辛苦が報いられた様でした。

しかし檀家も少ない此の寺で本堂復興の大事業を遂げながら一方社会事業に奉仕する一家の経済は実にきびしいものでした。その切りつめ、切りつめた生活の中で、子供達に貧しさを感じさせない様明るく育ててくれました。

た。そうして、兄と妹を東京に京都に遊学させてくれた親の慈悲。今考えて見ますと友達の中で最低に貧乏だった私が一番威張っていた当時を思い出し只、苦が笑いするばかりです。「自分のことは考えなくてまず人のことを考えなさい、自分の幸せを願わなくても人の幸せの為にまごころで尽してゆけばおのずと自分も幸せになる」と常にいい聞かせ又、「若い時の苦勞は買ってもせよ」とさとしてくれた母の聲が今も尚聞こえる様に私の毎日を導いてくれます。

お盆と亡父

椎 尾 辨 章

(東京大学医科学研究所)

昨春の四月七日に父辨匡が一世紀に近い、多彩な生涯の幕をとじ、七月に迎えた新盆には、小寺に西麻布の福井明賢上人の来臨を得て、新盆供養の御回向を賜った。席上同師から、名古屋教校の一室で、黄色い素絹を着し

た一高に入学して間もない父との初めての出逢いの有様をつぶさにお話し頂き、若き日の父の姿を今に見る思いをいたしました。が、今年もこの号が出版され皆様のお手元に届く頃は丁度お盆です。お盆がくる度に私は亡祖父、亡母、亡兄弟のありし日を憶い、涙あらたに迎えるの香をたき、華を捧げて、往時を偲んで還来をこい願ひ、敬虔な祈りを捧げるのが小寺の七月十三日夕の毎年のしきたりになって居ります。この行事を小学生の頃、手をとってヤンチャ坊主の子供達を集めて、教えて呉れたのが、今年で二回目のお盆を迎える亡父辨匡です。父は大正の中頃から共生運動の体型がととのい、地方への講演行脚が多くなって多忙な日がつづき、一日四時間位の睡眠時間しかとれぬ状態でしたが、毎年七月のお盆を迎える前々日位には清林寺に帰って来て幼い子供達を動員して、自らも卒先して墓地の清掃とか、本堂の掃除等を行なわせ、共生結衆で行う美化作業を教えて呉れたわけです。

まづ仕事にとりかかる前に子供達や学生さんを集めて、竹ぼうきを両手で持たせ両脚を屈伸させて「ヨイサ」「ヨイサ」の掛け声で「天つき」体操を十回位やらせてから各自の持分を決めさせて仕事に取りかからせまし

たが、之は準備体操ですが、子供達は久しぶりで帰宅した父を囲んで一緒に体操なので大喜びでやったものです。本堂も墓地もキレイになると丁度その頃夕闇がせまり、父は墓参用の線香に沢山火をつけさせ、清掃すんだ各々の墓前に一本一本供えさせ、自分は後から墓回向をしておりました。この行事が終る頃、闇夜の中に点々と線香の火が輝き、愈々お盆がやって来たとい子供心に感じたものです。

今年は亡父の辨匡塔の墓前で家族一同で香をたき還来をこい願ひます。合掌

師匠としての父

吉 池 誠

(長野県松本市在住)

一掃除、二勤行、三学問、寺の小僧生活はこのことをまず頭にたたき込まれたものである。夏の朝はまだよいが、寒い冬の朝などは、寝床のぬくるみが離れがたく、もすもすしていると布団をめくり上げられてしまうので

ある。

学校へ出かけるまえに、庭の掃除と客殿の清掃は毎日かすわけにはいかない。毎日のことだから、庭はともかくとして、客殿や座敷はよごれていない場合も多い。ときによっては適当に塵のみ拾ってすましてしまうことも、またしばしばであった。あるとき、父は「わしの部屋に來い」といつになく険しい顔つきで言った。なんのことか分らずに、部屋にゆくと、

「お前、今朝、座敷を掃除したか」
と父は聞いた。

「はい、しました」
と多少びくびくしながら返事をした。

「いや、しまい」 「いやしました」
と言葉のやりとりをしているうちに、「それならば現場にいく」と父はいうのである。

部屋の中を一巡した父は「これでしたのかね」と問いつめるのである。しばし黙っていると、隅にある火鉢をどかして「この埃（ほこり）はどうしたのだ」という言葉に窮していると父は、「掃除というものは、真中だけやるなら誰れでもやる。眼のとどこかないところに、気を配ってやるのが大切なことだ。

お寺でいう、一掃除、二勤行、三学問という、その一掃除とは、眼前にうつる塵や埃を清掃するということだけではない。眼前にみることでできないもの、すなわち、心のほこりやけがれをとり除いて、心を清浄にすることに、掃除の眼目があるのだ。」

その当時、小学生の五、六年ごろのことで父のお説教は、あまり身に入らず、小言ぐらいにしかうけとれずむしろ、あるときにはあまり敵しいので、ことによると実父ではないのではないと思うことさえあった。年が長ずるにいたり、幼少のころの父の言葉が、あざやかに甦えり、父の言わんとする奥深い心が、自分の心に響きつたわってくるから不思議である。

いまになると、敵しい父はうすれて、温和なやさしい父の心づかいのみが残ってくる。

攻守立場を異にして、さて父の立場より子供をみるとき、あるときには、父の座を離れて、師と弟子となり、または教師と生徒といった関係をもって指導することのむずかしさをつくづくと感ずる。父は、それを教えてくれた。時代は移ってゆくが、人間が生きつづけるかぎり、心と心のかよい合うことの大切さは変らない。現代をみつめて、そのむずかしさを思うこと切なるものがある。

手	仏
び	教
き	の

<3>

日本仏教の宗派について

問 真言宗のおしえについて、もう少し詳しくわしく説明してください。

答 真言というのは、サンスクリットのマントラを意味し、短い語句からなっている呪文をいうのです。宗祖の弘法大師は、「法性のことを指して真言という。」とものべられています。

それは、すなわち現象の本体、万物の実体のことをいうのです。また、陀羅尼（だらに）とは、普通長い呪文のことをいうのですが、ここではやはり万物の実体をさしているのです。それゆえ、真言陀羅尼をとえれば、無量の功德があるといわれています。

問 誰れでもとなえると功德をうけることができるのでしょうか。

答 真言宗のおしえでは、どの真言行者も真言陀羅尼を口となえて、身では神秘の思想を象徴する、いろいろの印を結んで、心で本尊を思うこの三密の行を修して生身のままで成仏する、すなわち即身成仏を説いているのです。

この真言宗では、教理を実践する作法、護摩、祈禱、供養法などを重んずるので、一面祈禱宗といってもよいほどです。

問 天台、真言の宗派のことはわかりましたが、鎌倉時代の宗派について教えてください。

答 まえにも申しあげた通り、仏教が広まってくると、一方においては荘園制度の発達などによって寺有の領地が拡大され寺院の勢力が増してきました。このため貴族等と結びついてしまい、一般大衆とだんだん遊離してしまいました。その反動として、鎌倉時代に入ると、大衆のなかに飛びこみ、

庶民を相手とする新しい仏教の革新運動がおこりました。法然上人の浄土宗、親鸞上人の浄土真宗、日蓮上人の日蓮宗、栄西禪師の臨済宗、道元禪師の曹洞宗などが、その代表的な宗派です。

問 鎌倉仏教の先駆的な役割を果たされたのは、法然上人
とうかがっていますが……

答 そうです。むかしから、大師は弘法、元祖は法然といわれますように、法然上人を元祖さまと呼びならわしています。その元祖さまといわれるゆえんは、お念仏の元祖という意味と、もう一つ、ほんとうの意味の日本仏教の元祖という意味があると思います。インドに興った仏教が、中国に伝わり、やがて日本に伝えられて日本人の血肉の中に流れこんだわけですが、仏教が、もともと日本的な展開をしたのが、鎌倉仏教でし、その扉が、法然上人によって開かれたということができましよう。

問 浄土信仰は、法然上人によってはじめて立てられたものでしょうか。また、どこで修行されたのですか。

答 日本では、往生浄土の信仰は、聖徳太子の時代から見られたのですが、浄土の信仰が弥陀の浄土、西方の極楽浄土

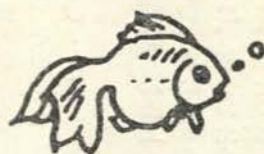
というふうに実際に実を結んだのは、法然上人の浄土宗の開創によってであります。

上人は、比叡山において修行されたのですが、中国の僧、善導大師の観経疏を読んでいくうちに、「一心専念……」という文によって、ただ念仏をとなえることによって、極楽往生ができるのだということを悟り、浄土宗を開かれたのです。比叡山を下りられた法然上人は、京都の東山の吉水に居をかまえてお念仏をとなえることによってすくわれるという、専修念仏のおしえをひろめられたのです。

問 なんのお経をよりどころとされたのですか。

答 浄土宗では、三経一論といっております。すなわち、三経とは、無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経の三つのお経であり、一論とは、世親という方が書かれた、往生論という書物です。これらをよりどころとして、阿弥陀仏の本願にすがって念仏すれば、われわれ凡夫でも、みな極楽浄土に往生できると信じて、「なむあみだぶつ」と唱えつづけるのです。

どんな学問にすぐれた人でも、智者の振まいをせずに、み仏のまえにおいてひたすらにお念仏することが、弥陀の本願の救済にあずかる道であると、法然上人はおしえられております。



異僧眞覺

第七回

柴田 六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

眞覺が、京若宮五条の大蓮寺、大竜和尚の弟子として入寺したのは、それから二年後、天明五年の春である。五年間竟空院主の膝下で努力した甲斐あって、経は一人前に読めるようになったが、眞宗僧侶が必須の説教となると、からきし駄目で、院主が如何に仕込んでも、人前では一言も話すことが出来なかった。檀家の息子ではあるし、殊に縁あって此の寺に僧となった彼を、何とか眞宗の僧侶に仕立てあげたいとの院主の願いは満たされそうもなかった。そうと判れば何とか彼の身の置き処を考えてやらねばならぬ。院主は、二年前、石山寺の茶所で逢うた大竜和尚の依頼を思い出して問い合せた。和尚は大悦びで「早速迎えるのをやる」と返事を寄来したが「他に話もあるから」と院主自ら彼を供なって大蓮寺に向った。

逢坂の関、追分を過ぎ、近江にゆかりの深い天智帝の陵を右手に東山の峠を降ると東海道は三条大橋に果てる。橋上の行き交いはさすがに繁く、眞覺はかねて噂に聞いていた京の賑わいに肝を潰した。被衣かっぎを着た女房が大勢の供を連れ、紋服に大小の侍が、これも足輕を具して行く。格式高い僧であらうか大きな朱傘を差しかけられ、中啓を斜に構えて悠然と歩む。商家の丁稚小僧は満載した荷車を掛け声を合せて引っ張ってゆく。そんな連中を引っかけまじき勢で馬に騎った侍が馳け抜ける。あわただしい往来の土埃を一杯に浴び乍ら橋のたもとに物乞いの掌を差しのべる非人乞食の群れ。危く衣の袖を掴まれそうになった眞覺は、顔色を変えて跳びすさった。院主は橋の途中で立ちどまって指さした。

「あれが大蓮寺の本山になる知恩院じゃ。いづれ大竜和尚



が連れて行ってくれるわ。それから右の方に見える塔、あれが清水さん。ずーっと右に塔は無いが大きな屋根が二つ見えるじやろ。左がうちの本山東本願寺。その右が西本願寺。その向うの塔の辺りが、弘法大師のお建てになった東寺じや。万福寺からは湖の向うに見えていた比叡山^{ひがし}があそこじや。つい眼と鼻の先じや。京で道に迷うたらあの山を見い。丁度京の東北にあたる訳じや。そう其処、橋のむこうに寺の屋根がずらりと並んで見えるのが寺町というて、寺ばっかりの町じや。それにしても本山は兎も角、如何にも寺が多いのう。何百何千の寺があるか判らんが、ちと多すぎるようじや。寺も多いが人も多い。どうも人間もあまり大勢集ると録でもない

ことをしてかすらしいわい。兎に角京は恐ろしいところじや。随分と要懐せいよ」

説明と注意を与えて歩き出した和尚の足は六角通りをまっすぐ西へ、頂法寺の門をくぐった。

「此れがいつか話して聴かせた親鸞聖人のお籠りなされた六角堂じや。」

叩頭念仏して顔を挙げた真覚はハッとした。

「院主さん、此の仏さんは？」

「如意輪観音じや。おお、そうじや。いつか石山さんへ連れて行ってやったな。あそこの本尊と同じ如意輪さまじや。」

ふーんこれは異な事じやの。石山へ参詣が縁で大竜和尚の処へ世話することになったが、その途で今また如意輪様を拝むとは。どうもお前はよくよく如意輪様に御縁が深いらしい。

これは有難いことじや」「善哉善哉じや」

あとは独り言になって悦んでいる院主の姿に真覚は言いようのない温かいものを感じた。

その夜大竜和尚と遅くまで話しこんだ院主は、彼が五年間手塩にかけた真覚についても、こまごまと語ったのである。翌る朝、

「和尚に呉々も頼んでおいたぞ。うちに居た時と同じようにやればよい。お経も一緒じや。ただお勤めの仕方は違うが

な、なに、じきに覚えるわい……」

其処で一寸鼻をつまらせた院主は、何か、もう一言言いたそうにして止めた。言葉を切ると、くると背を向けて、ずんずん歩き出し、門の前に立ちつくす真覚を振り返りもせず烏丸の通りを北へ曲ってしまった。

院主の姿が消えると、名状すべからざる淋しさが彼を襲った。敵しい師ではあったが、まどろかしい自分を五年の間勵まし勵まし、漸く三部経が読め、正信偈を誦しるところまで導いてくれた有難さが、そして甘えた言葉こそ出さなかったが、たった一人の自分の心の支えとしていた院主であつたと云う事実が、今その姿を失って始めて実感となつて彼をゆさぶつた。そんな思いと共に只一言の感謝の言葉も口にし得なかつたことが、激しい後悔の思いをつのらせた。

大竜和尚と、真覚より二歳年嵩の妙信尼に、彼を加えた大蓮寺の生活が始つた。万福寺とさして変らないが、浄土の勤行を妙信に習うことだけは苦痛であつた。おちまに似て瘦せぎすの妙信は容貌も何処か彼女に似ていたが、それよりも頭の先から出るような潤い高い声が、小さな机を挟んで向い合う彼の頭にキンキンと響いた。一刻も早く此のお経の稽古から開放されたい為の努力と、五年間の經典への親炙が彼を助けて、忙しい盆の季節を迎える頃には、一人前の浄土の僧とし

て読経し回向をあげることが出来るようになった。和尚は予想外に早い彼の進歩に眼を細めて（竟空奴、大分大げさに言いつたが、それ程の鈍物でもないわいとひそかに悦んだ。無口だけは竟空の話した通りで、何を話しかけても、そつけない調子で答えるだけで、決して彼の方から物を言うことな無かつた。

いつの時代から始まつたものか安産のお守りを授ける此の寺は、祈禱の依頼者が多い。彼もこの修法を和尚から伝授され、折々は二人に代つてこれを勤めた。惔然とした彼の表情と重厚な読経の声は如何にも効驗あるものの如くに聞こえた。名指しで真覚に祈禱を依頼する信者が次第に増え、妙信はその度にお茶汲みに廻らねばならなかつた。弟弟子にとつて代られた彼女は、顔一面に蕎麦粕を浮き上らせて不機嫌であつた。

繁昌する寺の中はそれでも平穩であつたが、巷では、一昨年以来の飢饉で何十万人という人が餓え死した、という噂がささやかれ、九月には京の南「伏見の町で町民が強訴した」と告げる瓦版を買つて来た和尚がそれを二人に示しながら、「どうも近年は彼方此方で一揆が起るし、オロシヤの船がやつてくる、段々世の中が騒々しくなつて来るようじゃ。天子様のお膝元の此の京の街に乞食は増える一方じゃし、ひと

つ此の世を建て直す修法はないものかのう」

と慨嘆した。

天明六年（一七八六）月、幕府は貸金会所を設けるといふ名目で、裕福な寺院や神社に御用金の拠出を命じ、大蓮寺にも十兩の割当が通達された。

「やあやあ、これは何ちうこっちゃ。年々本山に納める五兩でも精一杯のことなのに、十兩とは途方もない」

そういつて和尚は驚いたが、何処をどう運動して廻ったものか「どうにか五兩の拠出で済ませた」と、ほっと胸を撫でおろした。その年の八月老中の田沼意次が罷免されたと聞く

「当り前じゃ。此の貧乏寺から十兩を捲き上げようなどと」と無茶な話じゃ。坊主の怨みは恐ろしいからのう」

と小気味よげに笑った。

「江戸でも大阪でも米の価が無茶苦茶に騰つて、買えん者等が金持ちや米屋の倉を襲うて打ちこわしをしよるそうや。幕府のやり方が悪いとどえらい事になる。他所事やない。やがて京でもそんな事になるやも知れぬ。火の手がだんだん近うなつて来たぞ」

と真顔に返つてそんなことを言つた。

表紙の解説

総本山知恩院（四十八巻伝より）

京都東山をバックに、その偉容をはこる総本山知恩院は、文暦元年宗祖を開山と仰ぎ、法弟勢親房源智によつて堂宇が創立されて以来、わが国念仏宣布の根本道場として、念日まで綿々として活きつづけて来ていることは言をまたないであらう。早くして父と死別された宗祖は比叡山に登り、精根をかたむけて研鑽にいそしみ、當時の碩学を歴訪、遂に承安五年専修念仏を主唱されたのである。そしてその教えは全国津々浦々まで広まったのであるが、出る杭は打たれるの譬えの如く、幾多の難に遇い、建永二年専修念仏停止の宣下があり、遂には承元元年の土佐配流にまで及んだのである。その後、同三年赦免となったが、入洛は許されず摂津勝尾寺でしばらくを過され、建暦六年ようやくにして入洛をはたされたのである。その時、東山吉水の草庵は荒れるにまかせた状態であつたようだ。これに心痛された青蓮院門主慧円の指示により、大谷山・上南禅院（現勢至堂）に転住され、翌年西化されたのである。そして四条天皇から華頂山、知恩教院、大谷寺の三勅額、および永世勸願所としての宣旨を得て、源智により創立され、知恩院の基礎がここにできたのである。表紙の絵は同院に伝わる法然上人絵伝四十八巻（勸修御伝・四十八巻伝）にヒントを得て書いたものである。

林 靈 法 著

『法然人生論』

—現代人生論法話シリーズ—

周知のように著者林靈法師は、永年に渡って宗教情操を礎とした青年教育に尽力されて来た人であり、現在では浄土宗大本山百万遍知恩寺の御法主としてその重責を果しておられる。もとより、林師は当代では屈指の宗教者であり、その信仰伝導の溢るる熱意には衆人のあまねく感服するところである。殊に若人の中にあつては、師の雄弁な講演を聴いてあるいはその真摯な教えを受けて、現代というきわめて猥雑にして喧噪な時代に、一すじの生きる道標を見出したものも決して少なくはなからう。

本書は、「現代人生論法話」と総題された叢書の中の一冊であり、表題の如く、法然上人の宗教に真実に生きた信仰を発見した著者が優しく語り掛ける人生論である。第一部法然人生論、第二部生きることの意味、第三部人生の出会い——という構成からなり、著者の説明に

新 刊 紹 介

佐藤 治子 著

『旅 日 記』

旅、それは人びとに未知への期待と可能性をいだけせてくれる。旅、それは日常のある程度定められた生活を、一時期なりとも忘れさせ、限りある人生の心のオアシスともなる、たのしい思い出をいだけせてくれる。人びとはこうしたロマンティックな思いにいざなわれて、国内各地へ、そして海外へとその足をむけるのである。こうしたたのしい旅の思い出を記録にとどめておきたいと思うのは、その旅での思い出がより強いものである程、だれもが願うところであらう。しかし、現実にはなかなか実行できるものではない。

今ここに武田泰淳氏が「平凡な主婦の平凡な世界旅行」と表現し、そして、

どこにでも気軽に、自由にこだわらなく出入して、しかも相手方に嫌われない主婦というものは、そうざらにはみうけられない。著名はその性格が自然にそな

よればこの内容は次のようなものである。「第一部は、法然上人が自己の悲劇に始まる人生を、あの乱世に処してどのように受けとり、そこからどのように新しい人生の光を得られたかを述べている。第二部はこの法然上人の受けとり方から、現代の私どもが教えられ、勇気づけられていく重要な問題を述べたものです。第三部は、私の人生経験であって、失意と絶望の中から法然上人の信仰によって救われていった体験の一部を述べたものです」。

叢書の性格上、文章も淡々とした平易な講話風の語り口で記述され、広汎な学識と見聞によってまとめられた内容が、とても身近な感情で示されている。恐らくなにげなく読み終えた人でも、信仰に生きることの尊さをその真の意味を、本書を通して肌で感ずることができ得るであらう。背表紙に記された、「世に母あるは幸なり、父あるもまた幸なり、世に道を求むる者あるは幸なり」という法句経の言葉が何か胸の奥深くしみ入るようだ。心の籠った暖かい人生の手引書として本書を提示したい。

A 5版二六三頁価五〇〇円

発行所

京都市左京区京都大学前

雄 渾 社

わって、飾り気のない心の配りの細やかさが、この「旅日記」によく現われている。

と、著者に寄せての中で紹介しているこの「旅日記」は、そうした思いを実現した、たのしい旅の思い出の小冊子である。著者佐藤治子女史は、鎌倉大仏殿御内室として、内外に多くの知己があり、最近では浄土宗寺庭婦人会の初代会長として、大いに活躍中であるが、本書は武田氏の言をまつまでもなく、著者のそうした肩書をぬきにした、日本の平凡な一夫人の旅の思い出を綴ったものである。

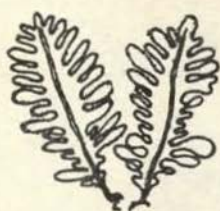
ながらく本誌に掲載したアメリカ・シルクロード・インド（附カンボジア）への旅の思い出を中心に、今ここに一冊にまとめたこの「旅日記」は、これから旅するであらう人びとにとっては、格好の指南書となると思う。それは文章の隅々にまで表わされた主婦の目から見た旅のでき事が、生々しく伝わってくるからである。是非一読をおすすめしたい冊子である。

四六版三三八頁価一五〇〇円

発行所

東京都文京区本郷五―二八―四

(有) 山喜房仏書林



明治の高僧行誡上人

三田全信

一 仏教の破壊

明治維新の排仏毀釈は仏教界に嵐を捲きおこした。各地各所で随分乱暴なことが行なわれた。江戸増上寺などが、徳川家の恩恵をうけて榮えていた指折りの大寺であるが、山門の楼上の釈尊像十六羅漢像が引き下されて、神道の神々が祭られた。僧侶は法衣を脱がされて衣冠束帯を身につけ御幣を振ったというからすさまじい。越中富山藩では、神祭式に改められ、お寺の鐘や仏具の類を献納せしめて柳町の正竜寺に積み上げてフイゴで溶かし鍋

や釜にしたり、寺は一宗に一ヶ寺とし、六十歳未満の者は、父母のお墓参りの外は寺へ立寄ってはならぬと定められたという。

伊勢神領では浄土宗の寺院が廢毀されたものの七十九箇寺もあった。鹿兒島藩内の仏教寺院が廢毀されたのが千六十六箇寺もあり、僧侶二千九百六十四人が還俗させられたというから大変なことである。増上寺には全国から約三千人の僧が集って学行に励んでいたのであるが、経済支給が断たれ次第に影をひそめて淋しくなっている。経済困難といえは知恩院でも排仏の影響を蒙って三門は入質あわや外国へ売られようとした。その借錢凡そ

二　も　し　火

五万三千七百円というからその当時としては頗る大金である。当時行誡上人の後住日野靈瑞管長は自ら草鞋をはいて全国へ募金に廻られたのである。これに感動して資金帳を墨で消したのは財界の大立物住友吉左衛門さんであった。

明治の初年には僧侶は肉食妻帯勝手たるべしという布令を政府が出している。当時の為政者は、こうしておけば坊主共は墮落して自ら身を破滅するだろう。そうしたならば強制的に還俗させなくとも自滅すると考えたのである。しかしこの考は甘かったようである。法然上人は元來持戒については厳しくは仰言っていない。徳川幕府になって真宗以外の僧に肉食妻帯を禁止したのである。

これが善いか悪いかは批判もあろう。しかしキリストの牧師でも夫妻が協力して伝道にあたっている。仏教の僧侶も大乘的な精神をもって僧侶の個人の生活まで厳しく規制しなくとも教化につとめることが出来るといふ信念によって、明治の為政者が考えたことは寧ろ反対に僧生活が安定したのである。

こうして明治の維新は大きな変化を仏教界に抛げたのであった。

福田行誡上人は、増上寺から知恩院へ晋まれた高僧である。明治の初年は啓蒙思想が盛んで新しいものを求めた。仏教界は排仏毀釈の嵐に遭って苦境に立ったのであるが、その最中であって僧風をひきしめた高德の一人であった。杉宮内大輔聴雨という人が、ある日宮中で和歌のお歌所の撰者高崎正風翁に、

いたづらに枕を照すともし火も

思へば人の油なりけり

といった七首の歌を見せられ、これは陛下の御覧に入れたもよい歌かどうか判定して下されと頼んだ。正風翁は一見して大いに驚きこれほどの歌をよむ者はただ人ではない、誰の作かと尋ねた。聴雨氏はこれは縁山の活仏の作と答えた。縁山というのは三縁山増上寺のことであるが、正風翁は縁山を泉山と聞き違えた。さて泉山……泉涌寺（京都）にそのような歌詠みがあったかな。是非出会いたいものだ。そののちに京都へ行かれる用務があって、尾崎実夫という人を頼んで泉涌寺を尋ねさせられた。ところがそのような歌人はないという。翁はなお

も、これほどの歌人を知らぬようでは歌道にうとい、東京であれば知らぬ管がないかと首をかしげられたという。それからのち赤松連城師に出会ってこの話をされる、増上寺のお坊さんということがわかった。行誡上人は歌道を修めて詠まれたのではない。ただ詠まれた歌に徳風がにじみ出たのである。上人の歌は多い。戯画も描かれている。花押がトンボのようなのでトンボ行誡などと花押の特長で行誡上人の字だと判別する。

また目に映った犬に向けられた温い情、これは上人の慈悲心であろう。

犬をいためる長うた

我庵に。たえずゆきかふ。母と子の。犬ぞありけり。あしたには。庭に乳のみて。夕べには。門に眠りて。此日ごろ。なれにしものを。前の世の。むくいしものか。うつし世の。わざはひなるか。ゆくりなく。昨日のあさけ。犬とりに。打ころされて。母と子の。しかばねまでも。なしときく。あないたましと。そとばたて。施食供して。思へらく。身を毛衣に。つゝまれて。形を横に。生れきて。吠ゆる外には。声もなく。あさる外には。わざもなく。狗子仏性は。名のみにて。顕現いづれの。日とかせむ。

しづのをだまき。静にも。思ひしとけば。後の世に。けふ殺されし其犬は。人と生れて。後の世に。けふころしたる。其人は。犬とうまれて。後の世は。またころすらむ。またころされむ。

返歌

我も亦をしとこそ思へをしと思ふいのちはおなじ命ならずや。

母子の犬が犬殺しに殺された犬の一生を憐み施銀鬼の供養までしてやられた。殺生の罪を犯すことを戒められた慈悲の流露であろう。ベトナム戦争で、この犬のように戦争という人間同志の争いのために命を失う人々のことが偲ばれる。

二 教の鞭愛の手

行誡上人は各地へ教化に廻られた。上人がある時神奈川地方へ趣かれた折、招かれて高島嘉右衛門という信者の立派な邸宅に一宿されることになった。主人夫妻は高僧のお泊りというので待遇につとめ、上人に旅の疲れをやすめて頂こうとした。どうしたらよからうと考えた上、絵をよくする某女史にお相手になって貰ったらよか

ろうというので女史にこのことを依頼した。女史も喜んで引き受け、お茶を立てて進じたり、絵を描いて見せたり、上人の詩にこたえた返歌などしたので、上人もその才芸に少なからず驚嘆された。上人に随行した三名の僧も女史の才能を堪えた。上人はこの随行の僧に「よく見られたか、女の人でもこのように学問才能を身につけているのは立派なものだ。そなた等は恥しくはないか」と仰ったので一同返す言葉もなかった。女史はいよいよ得意になってあれこれと自分の才能を発揮しようとした。上人はおもむろにしかし女性というものは柔順なのがよい。もし女性が僅かの才能を誇って柔順なことを志れるようなことがあったならば、拙僧としてはあまり感服出来ない、誰れやらの歌に

歌をよむ女房などはもたぬもの

亭主をしりにしきしまの道

と書いて女史に手渡された。女史はこの歌を読んで大いに恥じ上人の高徳に帰依したという。

上人が幼年の頃、向島小梅の近くに住んでいた智教という老尼がいた。上人が青年になって青雲の志を懷いて京都へ遊学したいと思つて師僧に申出られたが許されなかった。そこで親切に世話してくれた智教尼にこのこと

を相談された。老尼は師僧のお許しなくては行くことは出来まいとさとした。その後老尼は一夜金色の阿弥陀仏を京都に送つたと夢みた。そこでこれは必ず吉夢だというので上人のために旅費などを苦面し身廻りなど準備した。それはあたかも母親がわが子の一人旅を気遣うようであつた。上人はのちこの老尼の志厚く温情を深く感謝されている。そして日記の一節に書き留められている。

……おのれの今日に及びしは全く法尼が扶翼なるなり、此尼子なきを以ておのれを子の如くなむ思ひ奉るゝと常に云へり……

子がない者に子の愛情はわかるまいという。しかしこれは誤である。子のない者は子への憧れが強い。子をもつ親はわが子だけが可愛くて他人の子など、お愛想に可愛がる振をしてるだけだ。子なき者はどの子もこの子も同じように可愛いのだ。だから昔のお寺の小僧さんは師僧を親のように慕い、師僧は小僧さんを我が子のように可愛いがった。そこに現代と異質なものがある。

浄土宗夜話はなお多くの話題をもつ。しかし本稿をもつて一応閉じることにする。

筆者。

道

愛宕

への道

高橋良和

京都の東、北に愛宕山がある。京都では一ばん高い山で、たしか比叡山よりは六、七十米高いといわれているが九百二十四米ある。京都の人たちの親しい山である。

「伊勢へ七たび、熊野に三度、愛宕山へは月参り」という俗謡が今も古い人たちの耳に残っている。

この愛宕山には、中国の唐の代の五台山になぞらえて、山の五つの峰に、五つの寺が建てられていたといのである。それによると、朝日峰白雲寺、大鷲峰月輪寺、高雄山神護寺、竜上山日輪寺、鎌倉山伝法寺の五つである。

もともと本地仏は、時景地藏であったのが明治三年（一八七〇）の廃仏毀釈によって、この寺を廃して、愛宕神社として、軻遇空智神を主神として祀るようになったと言われている。

この山の中腹に月輪寺がある。月輪寺は山腹にあって、愛宕山の支峰である大鷲峰に抱か

れているところで、この寺のあるところは景色が一ばん美しい。

高雄の山をへだてて雲カ畑、岩屋山がみえ、眼下には、清滝の流れも手にとるようにみえる。

この寺に最近リフトがついたという便りを聞いた。何分不便なところで、重文の仏さまを守り、防災からいっても、すぐさま寺に行けないところであるから、この寺専用のリフトは便利であろうと、まだそれをみたことはないが、かげながらよろこんでいる。

この寺に法然上人二十五霊場の一つ、第十八番の霊場であって、その御詠歌も、

月かげのいたらぬ里はなけれども、ながむる人の心にぞすむ

の、法然上人のお詠みになった和歌のなかでも、宗歌として、うたっているあの月かげのうたである。

それだけにこの寺の由緒に法然上人に縁りの深いところであるといえる。

寺は天台宗に属しているが、その開基は、寺伝によると、天応元年（七八一）であって、慶俊僧都の開創をつたえる。

この開創の際に土中を掘ったところ「人天満月輪」という古鏡があらわれたので、月輪寺としたという伝説がある。

法然上人そして空也上人がこの寺に参詣したということ、もう一つは関白九条兼実公が、この寺に隠棲したと伝えられている。

九条兼実公は、法然上人に帰依した方であり、しばしば上人を自宅の邸宅に招いているが、元久二年（一二〇五）に法然上人がこの山荘にきて法話したあと、兼実公が上人を見送ったときに、池の橋にさしかかると、法然上人の御姿は、空中に浮いて、足に蓮華を踏まえ、頭上に光輪が現じたということである。

このことを頭光踏蓮の奇瑞と名づけている。日ごろ帰依する法然上人の姿を、九条兼実公は、そのような眼で拝したという一つの証拠であらう。

その池を探してみるが、今はあとかたもない。奇瑞は大瑞として、それながらに意味があることで、その詮策をする必要もない。

ところで、この愛宕山の月輪寺であるが、京都に月輪寺と名のつくところは、この外に二カ所ある。洛北修学院のあた

りと、東山東福寺の月輪殿の荘園である。何故にこの愛宕の月輪寺が法然上人の霊場になったかという点、先の「人天満月輪」の文字があったからだと伝えている。

もちろん九条兼実公もここに隠棲したとも伝えられているが、そうした文献が少ないのは残念である。或は他の二つの月輪寺の寺伝や、文献を調査してみれば、また異なったものがあらわれるかもしれない。この寺の三祖堂は宝暦年間九条実の建立したものということである。

法然上人がその月輪寺についての奇瑞のときは七十五歳といわれている。四国流罪の二年前のことである。

この月輪寺に京都から登るといふのは七十三歳の歳では、なかなか大変なことであつたと想像されるが、法然上人の伝記のなかでの頭光踏蓮の部門は重要なことであるが、今の月輪寺を思いながら、当時の兼実公の山荘としての月輪寺のイメージはあまりにも少ないのが残念である。

本堂には、千手観音像、阿弥陀坐像、空也上人立像があり、いづれも重文であるし、この外九条兼実公坐像など多数の重宝が所蔵されている。本堂の前に時雨桜がある。これは親鸞聖人に關するはなしで、聖人が流罪のとき、兼実公と別れを惜しんで手植えた桜といわれている。五月に咲くので葉末より雫を垂らすという伝説である。

浄土宗列祖の墨蹟をたづねて

此奥旨於洛陽金戒光^{廿九代}明寺堪蓮社忍誓懺^令傳授^早

正保元年

十一月二日 黒谷廿八世

往誓（花押）

此五卷之書去冬愚老手前、廻來候右示書黒谷之什物、可納置与林鐘廿四日書付候処、其夜半親智国師夢定中、西誓前可納置瑞夢依之、急指下候先年下候秘伝書、六月廿四日瑞夢候間咸涙銘肝、如此候

黒谷閑居

往誓（花押）

元和六年（一六二〇）十一月二日、源誓存応はその活躍を終えて七十七歳の生涯を終った。その一カ月前の十月四日には黒谷に送り込んだ了の札状を書いている。それには私が死んだら下向して欲しい。そして老期とい

っても何れもたのしいことはない。名匠といわれる曲直瀬道三に合衆をたのんでいるが効果がない。食べもののものを通らない。ともかく死後万事は理益と潮吞と相談して欲しい。といった主旨の内容である。浄土宗の実質の中興とまでいわれる親智国師でも死期に最しては、ぐちゃら不平やら自分の体が自由にならないいらいと、死ぬということに對してやるせない気持があつたのであろう。決して気どらないありのままの表現に相違ない。いくら活躍しても誰もこれでよいと胸をなでおろす人もなからう。この文中の潮吞が上掲写真の黒谷廿八世往誓である。国師の弟子は非常に多いがその中でも優れた人物の一人といつて過言ではない。彼は、武蔵埼玉の出身で三十年余も国師に随従したことになる。国師の最後を見取つて深川に雲光院を開

創した。それも徳川三代の將軍に使えた女傑阿茶の局を開基とした。けれど寛永三年四月には台命に従い黒谷金戒光明寺に入寺した。了的に続いだのである。現在黒谷の歴代墓の中この二人の墓石が群をぬいていることからしても中興とあおがれるゆえんがわからう。

潮吞という人は政治家的要素を多分に持ち合わせていた人と思う。徳川関係の夫人連中の墓地が黒谷に多いことなどもわかる。そればかりではなく、伝法史上忘れてはならない一人である。上掲の写真は有名な「潮吞切紙」の一部である。

正保元年（一六四四）十一月二日に忍誓に伝授した。そして黒谷の什物と定めた。けれど国師が夢中にこの伝書を西誓前（増上寺）へ納めるようにとの託言があつたので急いでやるといった内容である。しかも二度にわたっていることがわかる。ともかく潮吞としては伝書が散逸することは何としてもつらかつたのであろう。潮吞が国師の死期にまで随従した弟子であれば当然のことかも知れない。慶安三年四月十三日、国師より五つ若い七十一歳で寂した。

（田中祥雄）

此書育於治陽金成元
 明守^{たけ}堪蓮社忌養也
 と傳授す
 正保元年
 十一月二日
 黒谷丈八世
 住持
 此五卷之書去冬原光寺前
 廻來に右京書院に付物
 て細去に林鐘正言共付
 之度本親智國師夢全中
 國堂前て細去瑞夢依之
 息指下り光寺より秘傳
 六月廿日瑞夢方威儀新
 此書

新企画でスタートした

『浄土宗新聞』

をご家族みんなで読みましょう

タブロイド版8頁 (毎月1回発行)

年 額 400 円 (送料共)

発行所

東京都港区芝公園4-7-4 浄土宗務支所内

浄土宗新聞編集室

TEL (03) 436-3351 振替東京 163497

「浄土」購読規定

一部 定価 百円
 (送料十二円)

会費一カ年金一、二〇〇円
 (送料 不要)

浄土 七月号

昭和十年五月二日
 第三種郵便物認可

昭和四十七年六月二十五日印刷
 昭和四十七年七月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林 昭彦
 発行人 佐藤 密雄
 印刷人 関 二三男
 印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番
 〒一〇二 振替東京八二一八七番

戸川 霊俊 著

近刊 『若き日の軌跡』

大学の庭に宗教を説き哲学を講じて20有余年。東山沿いの哲学の小径を逍遙しながら若人に語りかけし青春と人生との珠玉の随想集………
一本を繕とかれたし

B六版 230頁 予価 800円 (〒140円)

京都東山
発行所 初音書房

“おぼん・おせがきの施本に好適”

『おぼん』

新書版表紙共12頁

価一部 15円 (200部以上13円) 送料実費

発行所 東京都千代田区飯田橋1-11-6 〒102
法然上人鑽仰会
電話 (03) 262-5944 振替東京 82187

佐藤 治子 著

新刊 『旅日記』

アメリカ・シルクロード・インド篇

本誌で掲載した世界旅行の随篇を一冊の本にまとめてみました。
「平凡な主婦の平凡な世界旅行」として気軽にお読みいただければ幸いです

四六版 320頁 単価 1,500円 (〒140円)

発行所 山喜房仏書林

御用のむきは本会までお申込み下さい。